HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	モーゼス・マイモニデスの見たキリスト教とイスラム教
Author(s)	山我, 哲雄
Description	日本基督教学会北海道支部2011年度公開シンポジウム「ユダヤ教とキリスト教」. 2011年6月11日. 北星学園大学, 北海道.
Citation	日本基督教学会北海道支部公開シンポジウム記録, 2, 20-37
Issue Date	2013-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95279
Type	conference paper
File Information	jscsh_002_20.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

モーゼス・マイモニデスの見たキリスト教とイスラム教

山我　哲雄

1．マイモニデスと彼のユダヤ教観

モーゼス・マイモニデス（1135年頃－1204年頃）は、中世におけるユダヤ教の神学および法学の確立者として知られ、特に、従来から613あるとされていた「律法（トーラー）」の掟（ミツヴォート）の個別的内容を確定した点で、現代のユダヤ教にまで大きな影響を与えている。彼は、イスラム教のムラビート朝治下のスペインのコルドバに生まれたが、アフリカからより「原理主義」的なムワッヒド朝がスペインに進出してユダヤ教徒やキリスト教徒にイスラム教への改宗を迫ったため、同地の有力なラビであった父に率いられて家族と共にコルドバを脱出し、一時はスペイン国内を放浪したが、1159年頃、モロッコのフェズに移り、そこでイスラム教徒を装って「隠れユダヤ教徒」として生活した。しかし、そこでも弾圧が強まったので、1166年頃、家族と共に船で聖地パレスチナに向かったが、当時のパレスチナは、第一回十字軍（1096－1099年）の征服後のキリスト教徒の支配時代で、マイモニデス一家にとっての安住の地とはなり得なかった。そこで一家は一年足らずで聖地を離れ、ファーティマ朝治下のエジプトに向かい、旧カイロに当たるフスタートに住むようになった。マイモニデスは、ファーティマ朝に代わったアイユーブ朝の支配者に侍医として仕えながら、エジプトで現地のユダヤ教徒の指導者として終生活躍し、多くの著作を残した[1]。

---

[1]最近の簡明な評伝として、以下を参照。I. Arbel, *Maimonides: A Spiritual Biography* (New York 2001); J. L. Kraemer, The Life of Moses ben Maimon, in: L. Fine, *Judaism in Practice* (Princeton 2001), 413-428; J. L. Kraemer, Moses Maimonides: An Intellectual Portrait, in: K. Seeskin (ed.), *The Cambridge Companion to Maimonides* (2005), 10-57. A・J・ヘッシェル『マイモニデス伝』（森泉弘次訳、教文館）。なお、N・ソロモン『ユダヤ教』（山我哲雄訳、岩波書店）,68-70.をも参照。

次に、マイモニデスのキリスト教、イスラム教についての見方を検討する前に、彼が自身の宗教であるユダヤ教についてどのように考えていたかを概観しておこう。マイモニデスが、ユダヤ教の信仰のあり方を十三の信仰箇条にまとめたことはよく知られている。これは、ユダヤ教の当時有力な分派で、ラビ的な口伝律法を認めないカライ派との論争の経験を踏まえ、マイモニデスが信じるところの「正統的」なユダヤ教の信仰の大原則をまとめたもので、彼の『ミシュナ注解』の「サンヘドリン篇」第10章への注解に含まれている[2]。その内容を略述すれば、次のようになろう。

（1） 創造者としての神の存在を信じる。
（2） 神の唯一性を信じる。
（3） 神の非物質性を信じる。
（4） 神の永遠性を信じる。
（5） 神のみを礼拝すべきことを信じる。
（6） 預言者たちが神の霊感を受けて語ったことを信じる。
（7） モーセが最高の預言者であることを信じる。
（8） トーラーが神に由来することを信じる。
（9） トーラーは真正であり、加えても削ってもならないと信じる。
(10) 人間の行いについての神の全知性を信じる。
(11) 神による賞罰の報いを信じる。
(12) 将来におけるメシアの到来を信じる。
(13) 死者の復活を信じる。

ここから見ても、マイモニデスのユダヤ教信仰理解がきわめて伝

---

[2] 英訳は、Helek: Sahhedrin Chpter Ten in: I.Twersky (ed.), *A Maimonides Reader* (Springfield, NJ, 1972)〔以下、M.R.と略記〕, 401-423.N・ソロモン『ユダヤ教』（注1参照）219-220をも参照。

統的で「正統的」(オーソドックス)なものであることが了解できる。すなわち、ユダヤ教信仰とは、万物の創造者たる唯一絶対にして全知全能の永遠の神のみを礼拝し、預言とトーラーの神的由来を信じ、メシアの到来による救いと死者の復活を待ち望むものなのである。

同時に重要なことは、マイモニデスの考えるユダヤ教が、選民意識に固執する民族主義的、閉鎖的なものではなく、ユダヤ人以外に対しても開かれた、普遍主義的性格を持つものだということである。このことは、まず、改宗者に対する彼の態度に示されている。当時のエジプトで、イスラム教からユダヤ教に改宗する者が少数ながらあった。しかし、そのような改宗者がユダヤ教徒の共同体内部で差別を受けると言う事件が起こった。マイモニデスは、アブラハムの信仰を引き合いに出し、アブラハムと同じ信仰を持つ者は、たとえ出自が異なっても信仰の兄弟であるとして、改宗者を平等に扱うように擁護している。

「われらの父祖アブラハムは、人々に心を開くことを教え、彼らに真実の信仰と神の唯一性を示しました。・・・それ以来というもの、ユダヤ教を受け入れ、トーラーに規定されている通りに神の名〔=神〕の唯一性を信仰告白するものは誰でも、われらの父祖アブラハムー彼に平安あれーの信徒のうちに数えられるのです」[3]。

さらに注目すべきことは、マイモニデスが、従来からユダヤ教で言われてきた「ノアの七戒」を重視して、改宗していない異邦人についても、終末時の救いにあずかる可能性を認めていることである。創世記9章によれば、人類を滅ぼす大洪水を箱舟で乗り切ったノアに対し、神は再び洪水を起こさないと約束し、同時に血の摂取の禁止などを含む一連の戒めを与えた（創世記 9:1-7)。タルムード時代のユダヤ教では、ここに以下の七つの戒めがあると解釈され、それらはユダヤ教のトーラーがモーセを通じて与えられる以前のものであるがゆえに、「ノアの子孫」である全人類を拘束するものと考えら

[3] 改宗者オバデヤへの手紙. Letter to Obadiah the Proselyte. *M.R.*, 475-476.

れた[4]。逆に言えば、この「ノアの七戒」を守っている限り、ユダヤ人以外であっても必ずしも「偶像崇拝者」とは見なされないのである。

（1） 司法（法廷）制度を設け、それにより正義を守る義務。
（2） 神を冒瀆することの禁止（偽証を含む）。
（3） 偶像崇拝の禁止。
（4） 性的不品行の禁止（姦淫や近親相姦の禁止）。
（5） 殺人の禁止。
（6） 盗みの禁止。
（7） 生きた動物から肉を切り取って食べることの禁止（血の摂取の禁止）。

マイモニデスによれば、「七戒を受け入れ、それらを良心的に守る者（異教徒）は、『義なる異教徒』の一人であり、来たるべき世に分け前を持つ」とされる[5]。「来たるべき世」（「オーラム・ハ・ヴァ」）とは、メシア到来時の救いにあずかることを示す定型句であるので、ここでは「七戒」を守る異教徒に、ほとんど敬虔なユダヤ教徒同様の救いが約束されていることになる。

2．『イエメンへの手紙』におけるキリスト教とイスラム教

次に、マイモニデスがその波乱の多い生涯において、直接、間接に接触した宗教であるキリスト教、イスラム教について、彼はどのように考えていたのであろうか。マイモニデスの全著作中に、ユダヤ教以外の宗教について組織的に考察したものは、残念ながら著者の知る限り存在しない。そこで、この問題を考えるためには、著作

---

[4] バビロニア・タルムード『サンヘドリン』56－60.英訳は、Hebrew –English Edition of the Babylonian Talmud. Seder Nezikin. Sanhedrin (London 1969), 56a-60b. これについては、さらに、以下をも参照。Encyclopedia Judaica , 1189-1191 Noachide Laws の項。D. Novak, The Image of the Non-Jews in Judaism: An Historical and Constructive Study of Noahide Laws (New York 1983).

[5] 『ミシュネー・トーラー』第 14 巻「士師篇」８章 11 節。*M.R.*, 221.

のあちこちに散在する断片的な論述を総合して考察しなければならない。

キリスト教とイスラム教について最も集中的に触れたマイモニデスの著作は、1172年頃書かれた『イエメンへの手紙』(「イッゲレト・テマーン」) であろう[6]。ただし、この手紙は書かれた事情も内容的にも非常に特殊なものであるので、取り扱いにはかなりの注意が必要である。

アラビア半島南部のイエメンにいたユダヤ人は、当時、同地のシーア派イスラム教徒の支配者から改宗を強制されていた。また、ユダヤ人の中からはメシアの先駆者を自称するカリスマ的人物が登場して人心を動揺させていた。こうした混乱の中で、同地のユダヤ人指導者がマイモニデスに行動の指針を求めた手紙を書いた。これへの返書が、『イエメンへの手紙』である。自分自身、かつてスペインやモロッコでムワッヒド朝による改宗強制の辛酸をなめたマイモニデスが、イエメンで苦しむ同信者たちに深く同情と共感を覚えたことは想像に難くない。この手紙でマイモニデスは、ユダヤ教の真理性と、イスラム教およびその先行形態であるキリスト教に対するユダヤ教の優位性を強調し、苦難の中で信仰を保つように激励している。

自分自身イスラム教徒のただなかに住み、しかもそのイスラム教徒の高官に仕える身のマイモニデスにとって、公然とイスラム教を貶める著述をすることには危険が大いに伴ったであろう。しかし、彼は、不安を覚えつつも、「公共の福祉のほうが自分の個人的安全よりも優先されるべき」という思いで筆を執ったと告白するとともに、手紙の内容が異教徒に知れることのないように注意してほしい、と懇願している[7]。

それゆえこの手紙には、自分の個人的な体験にも重なる義憤と怨

---

[6] 『イエメンへの手紙』英訳は、*M.R.*, 437-462.

[7] 同上。*M.R.*, 462.

念と敵意がこもっており、通常鋭利な論理と冷静な合理性を特色とするマイモニデスの全著作の中にあって、最も人間くさい情念のこもったものであると見なしてよかろう。

この手紙の最初で、ユダヤ人とその宗教を滅ぼそうとした者には、最初は武力を使う者（アマレク、セナケリブ、ネブカドネツァル、ハドリアヌス）と、より知的で「議論を用いる者」（シリア人、ペルシア人、ギリシア人）があったが、やがてより危険な、武力と説得の両者を組み合わせたより有効な方法を用いる新しい敵が現れるようになったとし、この計画を最初に採用した者が「ナザレのイエス」だったとして、イエスについて次のように記している。

「彼はユダヤ人だった。彼の父は異教徒だったが、彼の母がユダヤ女性だったからである。というのも、われわれの律法の諸原則によれば、ユダヤ女性と異教徒の間やユダヤ女性と奴隷の間に生まれた子供は、正統的（なユダヤ人）だからである」[8]。

マイモニデスはどうも、「処女降誕」したとされるイエスが実はマリアとローマ人の間にできた私生児だったという、ユダヤ人の間に広まっていた噂を採用しているらしい。彼はさらに続けて、こう記す。

「彼は人々を強いて、自分こそ、トーラー中の当惑の的となるような諸点を解明するために神によって遣わされた預言者であるとか、すべての先見者たちが予告していたあのメシアであるとか信じ込ませた。彼は律法とその諸規定がすべて無効になり、その戒めのすべてが破棄され、その禁令すべてが破られるような仕方で解釈した。しかし、彼の評判がわれらの民衆の間に広がる前に、われらの賢者たち－彼らに至福の記憶あれ－は彼の計画に気づき、彼に相応な罰を割り当てたのである」[9]。

マイモニデスにとって、イエスが偽メシアであり、彼が十字架で

---

[8] 同上。*M.R.*, 441.
[9] 同上。*M.R.*, 441.

処刑されたことが彼の偽メシア性の証拠であることは、『ミシュネー・トーラー』にある次のような言葉からも明らかである。

「もしある人物が完全に成功することがなく、それどころか殺されてしまえば、彼がトーラーで約束されたメシアではないことは明白である。・・・自分自身がメシアだと思い込んだナザレのイエスさえ、法廷によって死刑にされたではないか。これはダニエルが預言したことである。こう書かれている通りである。『あなたの民のうち荒くれ者が、みずから高ぶって事をなし、幻を成就しようとするが、失敗するだろう』(ダニエル書 11：14)。というのも、これ以上大きな失敗があるだろうか。すべての預言者が、メシアはイスラエルを贖い、彼らを救い、彼らの離散者たちを集め、戒めを裁可すると断言している。ところが彼のもたらしたことといえば、イスラエルを剣で滅ぼし、彼らの残りの者たちを散らしたり辱めることだった。彼はトーラーを変えてしまい、世界を誤らせて、神以外のものに仕えるように仕向けたのである」[10]。

イエスの後に興ったのが、イスラム教であるが、マイモニデスは『イエメンへの手紙』の前半の文脈では、その創始者を「狂人」と呼び、「ムハンマド」と名指しすることを慎重に避けている[11]。彼は、自分のための道を拓いた彼の先駆者（すなわちイエス）を範としたが、彼はさらにさまざまな規則の条項（おそらくは、ユダヤ教の律法にないイスラム教固有の戒律）を付け加えて、「彼の有名な宗教」を創出した。すなわち、それがイスラム教なのである[12]。

---

[10] 『ミシュネー・トーラー』第 14 巻「士師篇」、「王たちと戦争」第 11 章の末尾。ただし、この部分は、多くの印刷本で、キリスト教徒の検閲者によって削除されてしまっている。*M. R.*, 226. なお、D. Novak, The Treatment of Islam and Muslims in the Legal Writings of Maimonides, 235. in: W. Brinner/S. Ricks (eds.), *Studies in Islamic and Judaic Traditions,* Atlanta 1986, 233-250 をも参照.

[11] ただし、同じ『イエメンへの手紙』の後半で、マイモニデスは、ムハンマドの登場がすでに旧約聖書に名指しで予告されていたとするイスラム教徒の主張に反駁するために、ムハンマドの名を挙げている。*M.R.*, 449-450.

[12] 『イエメンへの手紙』 *M.R.*, 441-442.

マイモニデスによれば、「これらの男たちはいずれも、自分たちの教えを我らの神聖な宗教と同じレベルに置くことを目指した。しかし、神に由来する制度と人間の習慣を混同するのは、両者〔を区別するため〕の知識を欠いた愚か者だけである」[13]。両者の相違をマイモニデスは、いかにも医者らしく、理性を持ち神の創造した複雑にして精妙な内臓を持つ人間と、木や金属で作られた、中身のがらんどうな偶像の違いに例える。すなわち、外見上は多少似ていなくもないが、中身がまったく違うというのである。

言い換えれば、マイモニデスは、ユダヤ教とキリスト教やイスラム教の間に一定程度の外見上の共通性ないし類似性があることは認めているわけである。ただし、その類似性は、われわれが想像しがちな唯一神信仰とか預言者的精神、「書物の宗教」という点にあるのではない。そうではなく、それらがいずれも、ある程度整備された倫理と戒律の体系を持つという点に存する。

「聖書の秘められた意味や律法のより深い意義を知らない無知な者なら、同様に、われわれの宗教と他の宗教を比較して、われわれの宗教には他の宗教と何らかの共通性があると信じるようになるかもしれない。これは彼が、トーラーには禁止命令と肯定命令があり、他の宗教にも赦されている行為と禁じられている行為があることに気づくからである。どちらにも、宗教的な守られるべきことの体系があり、肯定的な規定と否定的な規定があり、それらを守るか守らないかに応じて賞罰が定められている」。

ただし、「真の神的宗教」(すなわちユダヤ教) の絶対的な優位は、その肯定的な規定にも否定的な規定にも、「より深い意味」があるという点に存する。

「その一つ一つのすべてが、人の完全性を求める努力を助け、卓越性を獲得するうえでのすべての障害物を取り除いてくれる。これらの戒めは、大衆とエリートの双方がそれぞれの能力に応じて、道

---

[13] 同上。*M.R.*, 442.

徳的および知的徳性を獲得することを可能ならしめる。こうして、神に属する共同体は卓越したものとなり、二重の意味での完全性に到達する。第一の完全性とは、人がこの世における人生を最も快適で自分に合った条件のもとで過ごすということである。第二の完全性とは、各人がその生来の力に応じて、知的な目標に到達するということになろう」。

これに反し、他の宗教の教えは、ユダヤ教の教えの皮相な模造品に過ぎず、キリスト教やイスラム教がいくらユダヤ教を模倣してみても、「サルが人間の動作をまねするのを見て人が笑ったり微笑んだりするように、揶揄や嘲笑の的になるのが関の山」であるという[14]。

それではなぜ、その卓越した神の法を持つユダヤ教徒が、劣った宗教のキリスト教や特にイスラム教徒の下で辛苦と屈辱にあえぎ続けねばならないのだろうか。この問題に対するマイモニデスの答えは、きわめて「旧約聖書的」であり、預言者エレミヤや列王記の著者たちの認識と大幅に一致している。

「思い起こしてほしい、同信の人々よ。われわれの罪の膨大さの故に、神が我らをこの民族、すなわちイシュマエル人（＝アラブ人）のただ中に投げ捨てられたことを。彼らは我らを厳しく虐げ、我らに対して有害で差別的な法を課した。聖書がわれわれに、『我らの敵が自ら我らを裁くであろう』（申命記 32：21）とあらかじめ警告していた通りである。彼らのように我らを陵辱し、侮辱し、虐げ、憎悪した民族はかつてなかったほどだ」[15]。

しかし、ユダヤ教徒は信仰を捨てるべきではない。なぜなら、苦難は永遠に続くわけではなく、最終的な救いは神の摂理に含まれているからである。

「一時は彼らが勝ち誇っているように見え、長期であれ短期であれ、支配的な地位にあるように見えようとも、彼ら（の支配）がい

---

[14] 同上。*M.R.*, 442-443.
[15] 同上。*M.R.*, 457.

つまでも続き、持ちこたえるわけではない。われわれには、はるか昔からの変わらざる神の確約がある。われわれに対して背教の判決が下され、怒りが起こるたびに、最後は神がそれを破棄してくださるだろうという確約が」[16]。

マイモニデスによれば、イシュマエル人〔すなわちアラブ人＝イスラム教徒〕による圧迫は、すでにヘブライ語聖書中の『ダニエル書』に預言されていた。すなわち、ダニエル書に四匹の巨獣が出てくるが、さまざまな時代に多くの人々がこの寓意的幻を自分たちの時代に引き付けて解釈したように、マイモニデスはそれらをローマ、ペルシア、ビザンチン、アラブの諸帝国と解釈しているのである。

「これは、神の霊感を受けたダニエルの預言に予告されていたことである。それによれば、未来のある時点で、真の宗教に類似した宗教と一つの聖典と口伝の教えを持った男が登場し、傲慢にも神が自分に啓示を下した、自分は神と会話したなどと主張し、その他にも法外な主張を行うのである。すなわちダニエルは、ローマ帝国滅亡の後にイシュマエル人の帝国が台頭する次第を描写するに際して、あの狂人の出現と、ローマ、ペルシア、ビザンチン諸帝国に対する彼の勝利について暗示していたのである」[17]。

しかし、ダニエル書の幻によれば、この第四の巨獣もついには神によって滅ぼされるのである（ダニエル書７：11)。マイモニデスによれば、ダニエルは、「神がやがてはこの人物を、彼の偉大さやその権勢の長い持続にもかかわらず、彼の先駆者たちのまだ生き残っている信奉者たち〔すなわちキリスト教〕ともども滅ぼすことについて、神から知識を与えられていた」のである[18]。

３．他の著作におけるキリスト教とイスラム教

前節の検討の最初にも記したように、『イエメンへの手紙』におけ

---

[16] 同上。*M.R.*, 444.
[17] 同上。*M.R.*, 443.
[18] 同上。*M. R.*, 443-4.

る悪意のこもったとも言える激情的なキリスト教、イスラム教批判には、特殊な執筆事情とも関わる例外的なものがあり、マイモニデスの他の著作おけるキリスト教とイスラム教についての言及は、より距離を取った冷静なものが多いように思える。まず、最初に注目すべきは、マイモニデスの哲学的主著ともいえる『迷える者への手引き』[19]において、ユダヤ教と、キリスト教、イスラム教の共通性に触れている箇所が見られることである。しかしながら、ここでも三者の共通性として指摘されるのは、一神教性でも預言者的性格でも、「聖典的」宗教性でもないし、また『イエメンへの手紙』におけるように、外見上類似した戒律の体系を持っているということでもない。

「われわれ三者、すなわちユダヤ人、キリスト教徒、イスラム教徒に、共通するものがあることは疑いない。それは、世界が時間的に創造されたことを認める点である。このことの妥当性は、奇跡やそれに類するもの妥当性と連動している」[20]。

マイモニデスがアリストテレスを「哲学者たちの首領」と呼び[21]、その哲学体系とユダヤ教神学の総合を図ったことはよく知られている。しかし、マイモニデスが哲学的な諸問題すべてにおいてアリストテレスに従っていたわけではない。マイモニデスがアリストテレスに同意できなかった最大の論点の一つが、アリストテレスの説く世界の永遠性であった。この世界観は、神が時間の中へと世界を創造したと説く聖書的世界観とは相容れなかったのである[22]。

「アリストテレスが見たような意味での永遠性への信仰、すなわち世界は必然性に従って存在しており、いかなる自然の変化も起こらず、物事の通常の運行は何に関しても変更することができないと

---

[19] 『モレー・ネブキーム』、英訳は、Moses Maimonides, *The Guide to the Perplexed.* Trans. by S. Pines. 2 vols. (Chicago 1963).

[20] 『手引き』第1巻71章95a. *Guide*, 178.

[21] 『手引き』第1巻5章17a. *Guide*, 29.

[22] これについては、特に、K. Seeskin, *Maimonides on the Origin of the World* (New York 2005) を参照。

いう信念は、律法をその根本から破壊してしまい、あらゆる奇跡を必然的に虚偽にしてしまい、律法が提供したあらゆる希望と威嚇を戯言に変えてしまうことだろう。・・・もし、哲学者たちが、アリストテレスが理解したような意味で（世界の）永遠性を証明できたなら、律法の全体が無効になってしまうだろう」[23]。

この点で、神による時間的な世界創造の信仰、すなわち創造以前に世界は存在しなかったという観念は、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教に共通するものと認められる、というわけである。しかし、これ以外の点で、三つの宗教の共通点に関する指摘はない。前述の論述の続きは、次のようになっている。

「しかし、この二つの共同体〔すなわちキリスト教とイスラム教〕が扱いに困り、また論議に夢中になっているその他の事柄、例えばキリスト教徒が没頭している三位一体の観念の研究や、イスラム教徒の特定の宗派が没頭しているカラーム〔イスラム神学〕の研究について見れば、・・・それらはわれわれにとっては、いかなる意味でも無用なものである」[24]。

イスラム神学（カラーム）ないしイスラム神学者（ムタカッリム）の議論については、マイモニデスは『手引き』の中で一貫して批判的な姿勢を保っている[25]。より注目すべきは、ここでキリスト教の「特有」の概念として、「三位一体論」が特に引き合いに出されていることである。マイモニデスのユダヤ教的一神論の立場から見れば、キリスト教の三位一体論が神の唯一性を損なう誤謬であることは明らかである。

---

[23] 『手引き』第２巻 25 章 55a. Guide, 328. マイモニデスは、この点ではむしろプラトンを評価する。プラトンが『ティマイオス』などでデミウルゴス（創造神）による世界の時間的創造を描いているからであろう。『手引き』第２巻 13 章 28b. Guide, 283.をも参照。

[24] 『手引き』第 1 巻 71 章 95a. *Guide*, 178.

[25] これについては、特に、W. Z. Harvey, Why Maimonides was not a Mutakallim, in: J. L. Kraemer (ed.), *Perspectives on Maimonides. Philosophical and Historical Studies* (London/Portland. OR. 1991), 105-114.を参照。

三位一体論への批判は『手引き』の他の箇所にも見られる。マイモニデスは、いわゆる否定神学の見地から、人間的な言語では、神の本質については「・・・でない」という否定的表現でしか適切に述べ得ないと考え、神の属性を分析することに反対する。その際にマイモニデスは、神の属性を数え上げようとする人々を、キリスト教の三位一体論者になぞらえている。

「もし誰かが、彼（＝神）は一でありながら、一連の特定の本質的諸属性を持つと信じるならば、その者は言葉では彼（＝神）が一であると言いながら、考えでは彼（＝神）が多数であると信じていることになる。これは、キリスト教徒が言っていることに似ている。すなわち、彼（＝神）は一にして三でもあり、三が一であると言うのである」[26]。

したがってマイモニデスにとって、キリスト教は一神教とは言えず、ユダヤ教聖書の唯一神観から逸脱した異教、ある種の多神教と見なされるべきものであったにちがいない。

マイモニデスは、キリスト教世界に暮らしたことはない。彼のキリスト教体験と言えば、書物によるものや、コルドバやフスタートでの何人かのキリスト教徒との個人的な知人関係を除けば、十字軍支配下の聖地パレスチナに数ヶ月滞在したことだけだったと考えられる。

そこで彼は、聖地奪還の歓喜と興奮も冷めやらぬ狂信的なカトリック教徒たちの聖像や聖画や聖遺物に覆い尽くされた宗教生活を直接目にしたことであろう。その印象について、筆者の知る限りマイモニデスは何も書き残していないが、最近マイモニデスの評伝を刊行したイリル・アルベルの次のような推測は、当を得たものであろう。

「理論的には、彼もキリスト教が聖書に従っていることを知っていた。しかし、マリア、キリスト、諸聖人の立像や肖像は、偶像として彼に衝撃を与えた。それゆえ彼は、キリスト教徒が異教徒であ

[26]『手引き』第1巻50章56a. *Guide*, 111.

るとの感を拭い去ることができなかった」[27]。

この点で、ユダヤ教徒と同様、徹底した唯一神観を持ち、厳しく偶像崇拝を禁じるイスラム教は、キリスト教と異なっている。前述のように、『手引き』の中でマイモニデスは、イスラム神学（カラーム）やイスラム神学者（ムタカッリム）を徹底的に批判しているが、それはイスラム神学者たちーおそらくは、ムウタジラ学派やアシュアリー学派、アル・ガザーリーなど[28]ーの議論の諸前提や論理構成に対する形而上学的ないし哲学的批判であって、宗教としてのイスラムそのものや、その信仰内容に対する批判ではない。

マイモニデスが宗教としてのイスラム教を実際にどう理解していたかは、彼の哲学的著作よりも、彼がユダヤ教指導者として各地のユダヤ教徒の問い合わせに対して書いた回答状、いわゆるレスポンサ（ヘブライ語でテシュヴァー）の中によく表われているように思われる。

イスラム教からユダヤ教への改宗者の問題に関連して、イスラム教徒は偶像崇拝者（オブデー・アヴォダー・ザラー）であるかどうかが問題にされた際に、マイモニデスは次のように書き送っている。

「これらのイシュマエル人〔＝イスラム教徒〕は決して偶像崇拝者ではありません。それ〔偶像崇拝〕は、彼らの口からも心からも払拭されています。なぜなら、彼らは一なる神に身を委ねているからです。」[29]。

ユダヤ人にとって、ぶどう酒は祭儀に用いる神聖なものであり、偶像崇拝する異教徒の作ったぶどう酒は、ユダヤ教徒は飲んでも、商品として扱ってもならなかった。あるとき、イスラム教徒の作ったぶどう酒をどう扱うべきかという議論が起こった。これについて、

---

[27] I. Arbel, *Maimonides* (注 1 参照), 50.

[28] S.Pines, *Guide of the Perplexed* (注 19 参照) , Introduction, cxxiv-cxxxi.および A. L. Ivry, The Guide and Maimonides' Philosophical Sources, in: K. Seeskin (ed.), *The Cambridge Companion to Maimonides* (2005),, 58-81; W. Z. Harvey, Why Maimonides was not a Mutakallim, (注 25 参照),等を参照。

[29] D. Novak, The Treatment of Islam and Muslims (注 10 参照), 238.の引用による。

マイモニデスは次のように書いている。

「七つの戒め〔＝ノアの７戒〕を受け入れた寄留の異国人（ゲール・トーシャブ）については、彼のぶどう酒を飲むことは禁じられていますが、それで金を稼ぐことは許されています。・・・これらのイシュマエル人〔＝イスラム教徒〕のように、偶像崇拝を行わない異教徒についても同じです。すなわち、彼らのぶどう酒を飲むことは禁じられていますが、それで金銭上の利益を得ることは許されています」[30]。

イスラム教徒は異教徒だから、彼らの作ったぶどう酒を飲んではならない。しかし、彼らは偶像崇拝者ではないから、彼らのぶどう酒で商売することはかまわない、というのである。ここでは、イスラム教徒には、滅ぼし尽くされるべき偶像崇拝の異教徒ではなく、ユダヤ教に改宗せずとも「ノアの７戒」を守る「寄留の異国人」と同等の者として、むしろ保護の対象となる地位が認められている。それゆえ、全体として見れば、マイモニデスがイスラム教徒を、一なる神を信じ、偶像崇拝を行わない者として、キリスト教徒よりも肯定的に評価していたことは明白である[31]。このことは、マイモニデスが自身でもしばしばイスラム教徒から迫害や圧迫を受け、また、各地で同信の徒がイスラム教徒の圧政下にあって信仰の危機に直面していることに常に心を痛めていたことを考え合わせれば、まことに注目に値する事実である。

ただし、少なくともある一点に関して、マイモニデスはキリスト教をイスラム教よりも肯定的に評価していたふしがある。それは、文書としての「トーラー」、すなわちモーセ五書、ないしヘブライ語聖書全体に対する態度に関わっている。キリスト教は、五書を含む

---

[30] D. Novak, The Treatment of Islam and Muslims (注 10 参照), 236.の引用による。

[31] これについては、以下をも参照。I. Twersky, *Introduction to the Code of Maimonides (Mishneh Torah)* (New Haven and London 1980) 452; H. Kreisel, *Maimonides' Political Thought: Studies in Ethics, Law, and Human Ideal* (Albany NY 1999), 39-40, 198.

ヘブライ語聖書全体を『旧約聖書』として自分たちの正典に取り入れているが、イスラム教徒は事実上、彼らの『コーラン』がすべての「啓典（キターブ）」に取って代わったものと見なしている。

タルムードには、前述の「ノアの７戒」以外のいかなる律法も、異教徒（もちろん改宗者は除く）に教えてはならないという規定がある。これが同時代の異教徒についてもそのまま当てはまるかどうかを問われた際のマイモニデスの回答はまことに興味深い。彼は、他の戒めをキリスト教徒に教えることは許されるが、イスラム教徒に教えることは許されないことを指示して、次のように述べている。

「それらの戒め（ミツヴォート）をキリスト教徒（ノツリーム）に教え、われわれの宗教に導くことは許されていますが、それはイシュマエル人〔＝イスラム教徒〕には許されていません。これは、このトーラーは天〔＝神〕の啓示ではないという、あなたたちも知る彼らの信仰の故です。あなたちが彼らに聖書の何かを教えたとしても、彼らはそれが、混乱した物語や彼らに伝えられた支離滅裂な教理に基づき、彼ら自身の心がでっち上げたものと矛盾すると考えるでしょう。彼らが誤謬を抱いているので、それは彼らにとって何の証しにもならないでしょう。・・・ただし、割礼のない者たち（キリスト教徒）は、トーラーの（彼らの持つ）版は何も変えられていないと信じています。ただ、彼らはそれを彼らの誤った釈義法で解釈しているのです。・・・しかし、もしそれらの聖書本文が正しい釈義法で解釈されれば、彼らが正しい道に戻ってくるということも可能です。・・・彼らが彼らの聖書中に見出すもので、われわれのそれとは異なるものは何もありません」[32]。

したがって、唯一神の崇拝や偶像崇拝を行わないという点では、イスラム教の方がキリスト教より高く評価されているが、五書ないしヘブライ語聖書を尊重しそれを神聖な神的啓示として認めている点については、キリスト教の方が真の宗教（ユダヤ教）に近く、し

[32] D. Novak, The Treatment of Islam and Muslims (注 10 参照), 244.の引用による。

たがって救いに近いと考えられているわけである。

最後に、人類の信仰の歴史においてキリスト教とイスラム教が果たす積極的な役割についてマイモニデスが述べた興味深い文章を紹介しておきたい。それは、『ミシュネー・トーラー』第14巻「士師篇」中の「王たちと戦争」第11章の締め括りにある文章であるが、イエスについての前述の厳しい批判的記述があるために、多くの公刊本においてキリスト教の検閲者の手によって削除されてしまっている部分に含まれる。

ここでもまた、ユダヤ教とキリスト教やイスラム教の思想や用語の共通性や類似性が重視されている。キリスト教やイスラム教が世界に広まることによって、真の宗教の基本的な観念や思想が、たとえ誤りや誤解を含んだり歪められた形であれ、人口に膾炙し周知されるようになり、それがひいては、多くの人々が真の信仰へと目を開かれる訓練ないし準備になる、というのである。すなわちそれは、全人類史的に見れば、多神教や偶像崇拝の無明の中にある異教世界に、神の唯一性、その律法、メシア的救いなどの観念や考え方の枠組みを普及させ、彼らを真の普遍的な救いに向けて啓蒙する準備的役割を持つのである。

「ナザレのイエスと、彼の後に来たあのイシュマエル人（＝ムハンマド）に関連するすべてのことは、王なるメシアのための道を拓き、全世界が一致して主に仕える備えをするためのみにある。・・・というのも、『メシア的希望』、『律法（トーラー）』、『戒め』といったことが、よく話される話題となり、遠くの島々（の人々）や、心や肉に割礼を受けていない多くの民族の間で会話の主題となる。彼らはこれらの事柄や、トーラーの諸々の戒めについて議論し、ある者は、『これらの戒めはかつては真実だったが、もはや効力を失って、拘束力を持たない』と言い、別の者は、『それらには秘められた意味があり、字義通りに取るべきとは意図されていないのだ』とか、『メシアはすでに来たのであり、それらの隠された意味を明らかにしたのだ』、などと言う。しかし、本当の王なるメシアが現れ、成功し、

高められ、上に挙げられるとき、彼らは直ちにそれを撤回するだろう。彼らは自分たちが父祖たちから虚偽ばかりを受け継いできたことと、彼らの預言者たちや先祖たちが彼らを誤った道に導いたことを悟るだろう」[33]。

ユダヤ教、キリスト教、イスラム教という三つの宗教が交錯する十字軍時代を生き、しかもキリスト教、イスラム教が圧倒的な力で世界の覇権を激しく争うように見えるなか、厳しい信仰の危機を体験しつつ生きたユダヤ教徒であったマイモニデスにとって、この三つの宗教の関係についての理解は、否が応でも複雑で屈折したものにならざるを得なかったことであろう。

（やまがてつお　北星学園大学教授）

[33] The uncensored version of the Kingsm Ch. XI., in: *M.R.*, 226-7.これについては、以下をも参照。D. Hartman, *Maimonides: Torah and Philosophic Quest* (Philadelphia 1976), 154-5, 250 (n.39); I. Twersky, I*ntroduction to the Code of Maimonides* (Mishneh Torah) (New Haven and London 1980), 452-3; Novak, The Treatment of Islam and Muslims (注 10 参照), 239-40.